

寄稿論文

労働・レジャー関係の今日的局面

The Current Phase of Work-Leisure Dichotomy

山田 良治

Yoshiharu Yamada

和歌山大学国際観光学研究センター

キーワード：労働、レジャー、疎外、管理、知識労働

Key Words : Work, Leisure, Alienation, Management, Intellectual Work

Abstract :

This paper discusses the changing relationship between work-leisure and argues that such a shift means a renewed development of human nature in one sense but also a deepening of human alienation in another. In terms of time as well as substance, human life consists of two active factors: work and leisure. Generally speaking, these factors are mutually influential binary oppositions, whose connection may be neglected if not seen as a whole. On the one hand, their substances are similar to the binary of physical and mental action itself. On the other hand, paid work and non-paid volunteer action differ significantly in terms of their social characteristics. In other words, the current significance of leisure should be recognised in the context of work-leisure dichotomy. Under a structural change of capitalistic economy—characterised by the shift towards service industries and global economy—the nature and form of work process has also dramatically changed. Simply put, “white collar worker” has become the majority and “intellectual work” has come to play an important role. This shift gives rise to changes in the worker’s desire in the work process as well as leisure activities.

はじめに

世界各地で頻発する戦闘による殺し合い、殺人事件はもとより、過労死・孤独死・いじめ自殺などのむごたらしい事件に見られるように、人間的な自由と幸福を阻害する事象が日常となるような時代が到来している。もちろん、情報の発達がかつては表面化できなかった事柄を表に出した側面があることは否定できない。しかし、それにしても一見自由と繁栄を謳歌しているような場合でも、今日では誰もが小さくないストレスと日々格闘し、将来に対する漠然とした不安感や孤独感を抱きながら生きているように見える。

本稿では、現代社会に暮らす人々のこのような心理状態を、人々の「自由時間」における諸活動にも広く浸透しているという意味で、「人間疎外」の全面化と捉えている。重要なことは、現代の「レジャー」（以下で行論の都合上しばしば「余暇」と表現する場合がある）活動は、人間疎外の全面化と同時に、その克服に向けた社会的な地殻変動においてひとつの重要な要素をなしていると考えられることである。

周知のように、レジャー（活動）の定義をめぐるのは、従来

から多くの議論が行われてきた。しかし、本稿の議論を進める上においては、その詳細にこだわる必要はない。ここでは、さしあたりそれがその主体にとって経済的な利益を目的とするものではなく、任意かつ主体的な活動として、その意味で自由な活動であるということである。「余暇の真の領域は自由な選択を本質とするものである」（フラスチェ 1973）。そしてこの場合、資本主義社会においては本質的なことは、自由な人間活動というものが何よりも非労働時間における活動において現れることである。

人間の生活が、＜労働時間＋非労働時間＞として一つの全体を構成する以上、そして両者が無関係に存在するどころか相互の前提をなしているものである以上、一方の意義を明らかにすることは、論理必然的に両者の関係性を解明することでもある。

労働と非労働活動との関係は、さしあたり労働時間と非労働時間（自由時間）との関係として現れる¹。1日が24時間と限られていることからすれば、両者は競合的な関係にあることは自明である。しかし、しばしば看過されることであるが、い

まひとつの重要な問題は、両者が内容的に関連しているという点である。結論を先取りすれば、労働（過程）の内容とそこで形作られる労働者の欲求は、非労働過程の活動内容と欲求のあり方を規定するとともに、後者の発展もまた前者のあり方に反作用するという関係の存在である。

本稿は、以上のような観点から、この問題についての第二次大戦後の議論を踏まえた上で、現代社会における労働・レジャー関係の位相を論じようとするものである。

I. 労働・レジャー関係論に関する文献レビュー

第二次大戦後、マス・レジャーの本格的な発展がみられるようになるとともに、レジャー研究も活性化するようになった。それに伴って、レジャーに関する学術的研究が発展することになるが、その際、理論的な研究においては、社会学分野を中心に労働・レジャー関係という観点での研究が一大論点をなした。レジャーそれ自体の本質を認識しようとする、人間の活動における二大構成部分として、その対極にある労働との関係に焦点が合わされるのは当然の流れである。そこでそのような観点が明確に打ち出されている主要な議論について、その特徴を概観しておくことにしよう。

第二次大戦後、今日に至るレジャー研究の展開は、大きく見るならば 1970 年代半ばを境に二つの時期に区分できる。それは端的に言えば、政策論的にはケインズ主義から新自由主義・グローバリズムへ、産業構造としては工業（ブルーカラー）主導から金融・情報・サービス業（ホワイト・カラー）主導の時代への転換・移行を背景とした議論の発展の反映として、あるいは、ハーヴェイの表現を借りれば「フォーディズム的なモダニズム対フレキシブルなポストモダニズム」（ハーベイ 1990）の対照として特徴付けることができる。

1. ケインズ主義の時代

まず、フランスの労働社会学者であったフリードマンの議論を取り上げることにしよう。

フリードマンは、労働とレジャー活動との関係について、次のように指摘した。

「もし我々が労働の中における職務拡大の現象を指摘しながらこれを今日の余暇活動の発達の一般的傾向と結びつけることをしないと、完全に意味をとらえ、理解することはできないであろう。実際、多くの人びとが方々の国々で、しかもまた種々の環境において余暇を利用しようとしているが、それは彼らが職業上の労働において消費することのできない潜在的能力をいろいろの仕方で余暇において発揮させるためであることが認められる。…工場、事務所、鉱山、作業場での職業生活における合理化された職務によって満足させられない興味、意義、参加、達成の要求やそうした職務が多くの人びとの心的状態の中に作り出した潜在的緊張は、労働外においてもその

圧力を維持しつづけ、一日または一週の労働時間の漸次的縮小によって可能となる増大する『自由』時間において労働者が求める活動にも影響を与えるのである。」（フリードマン、1956）

ここでは、レジャー活動は「職業上の労働において消費することのできない潜在的能力をいろいろの仕方で…発揮させるため」、あるいは職場での「潜在的緊張」を緩和するための活動として把握されている。つまり、労働とレジャー活動との関係は、労働者の能力の面では労働能力と労働の場では発揮されない「潜在的能力」の関係として、または前者で生じる緊張の捌け口と認識されている。換言すれば、労働（オートメーション化され、細分化された労働）の内部においては人間の潜在能力の発達が展望できなくなっていること、したがって、労働外の時間である余暇においてこそそのことが可能になるという彼のスタンスがある。フリードマンはこの点を次のように述べている。

「オートメーションが手でやる仕事を除去し、労働時間をいちじるしく短縮し、個人から心理的均衡と多くのばあい労働が個人に伝統的に確保していた人格の実現という基本的要素を奪ってしまう社会においては、この人格の実現の中心を自由時間、能動的な余暇に置くという必要性がいっそう切実になるのである。」（同上書）

あるいは、次のようにも言う。

「オートメーションの諸帰結は、そのもつとも熱心な主張者が熱意をこめて想像するように、輝かしいものであることができるのである。しかしながら、それはもし正義にもとづく制度や自由や英知を奪われた世界に転落すると、人間の墮落に寄与するという危険を持つのである。」（同上書）

つまり、「細分化された労働」においては人格の実現が強く制約を受けること、反面で自由時間における活動こそがその発展を担保するという見方である。オートメーション化する労働は、余暇の発展の条件となるとともにそれを制約するものでもあるが、その制約は余暇活動によって緩和されている。超長時間労働が人間の生命と人格の発達を脅かし、労働時間の短縮による自由時間の獲得こそが労働者の人間発達にとって彼らが直面する最重要かつ緊急の課題であった 19 世紀の課題が解決されたわけではない。それはフォーディズムに象徴されるところのオートメーション化という近代的な装いを纏いつつ、ある意味ではこれまで以上に人格の発達を阻害している。生産力の発展こそが自由時間実現の前提であることを認めつつも、労働の現場はなお苦行の連続である。こうして、人格の発達には、何よりも自由時間＝余暇の獲得とその活用に託さ

れることになる。フリードマンの議論には、19世紀の歴史と20世紀においてそれを発展させたオートメーション化の時代の現実が強く反映されているものと見られる。こうして、彼にとっては、「レジャー文明の時代」は、なお時期尚早であると考えられた。

一面でフリードマンの問題意識やスタンスを継承しながらも、こうした労働観を批判しつつ、よりレジャー論に特化して研究を進めたのがデュマズディエである。

デュマズディエにあっては、労働と余暇は人間活動の対等な要素として一体的・内的な関係をなすものであり、今日を「レジャー文明の時代」とみる観点からは、むしろ余暇こそが時代を牽引する主役となるべきものである。仕事をいわば必要悪のように捉え、自由時間に人間的であることの可能性を託すフリードマンの議論を批判して、彼は次のように言う。

「余暇はあきらかに労働過程の性格によって規制される社会的現象であるが、余暇もまた労働過程に影響を及ぼす。両者の作用が相まって全体的過程が成立する。労働は人間的な余暇を享受しうる条件を生み出したり、またそうした余暇への欲求を育てたりする限りににおいて、人間的になりうる。しかし、もし余暇が労働からの単なる逃避的機能を持つだけになったり、あるいは余暇が労働過程の技術的、社会的問題に対する関心を根本的に否定するようであれば、そうした余暇は工業的社会的問題に対する誤った解決法といえよう。／同じように余暇問題を労働問題と切り離して扱うことも不可能である。実際、余暇における価値を労働過程に導入してその人間化を計ることは、労働における価値によって余暇を人間化していくことと不可分の関係にある。」（デュマズディエ 1967）

このように、「余暇はあきらかに労働過程の性格によって規制される社会的現象であるが、余暇もまた労働過程に影響を及ぼす」と、両者の双方向性が強調されている。したがって、労働の中に非人間化を見、余暇の中に人間化を見るフリードマンに対し、「労働は人間的な余暇を享受しうる条件を生み出したり、またそうした余暇への欲求を育てたりする限りににおいて、人間的になりうる」と、労働を肯定的に位置づけている。こうした観点からのフリードマン批判は、7年後に出版された著作において、さらに明確化されている。たとえば次のような論述である。

「…レジャー社会学の歩みから触発された批判や態度留保の主張のうちでも、最近のG・フリードマンの考え方をとくに重要なものとして取上げたい。彼の技術文明の分析という枠組み内でのレジャーの省察は、大きく変化してきた。彼は最初レジャーを労働との関連でその代償もしくは気晴らしと考えてきた。ついで、どの程度自由時間が現実拘束や条件から解放された自由な時間であるかを知ることに努め、彼にとっていわば悲観的な答えを示唆するような多くの事実が自ずと登場す

るにいたった。たとえ多くのばあいにはないにしろレジャー価値が労働にますます影響を及ぼすこと、また他方、労働を条件づけるようないっさいの他の諸活動にもレジャーの影響が増大することを示す一群の事実に大きな関心を払わなかったのである。そのうえ、1970年以降、全体として可能性としてのレジャー文明を考えることを排斥する。」（デュマズディエ 1974）

さて、同じ頃、ドーバー海峡を挟んだイギリスでは、スタンリー・パーカーが積極果敢な論陣を張っていた。まず、その著書『労働と余暇』から、彼の議論を見てみることにしよう。彼は、次のように労働と余暇の表裏一体性を強調する。

「私たちは近頃『余暇の問題』につきよく耳にする。だが労働の問題についてはそれほど耳にしない。しかし両方とも実際は同じ問題の側面なのであって、複雑な論点をすべて念入りに考察しようとすれば、私たちは他方と取り組まずには一方の解決に成功しそうもないことは明らかなのだ。」（パーカー 1971）

そうした観点から、やはりフリードマンを批判して次のように述べる。

「フリードマンの見解についてめんどろなことは、その見解が労働と余暇両方の領域における変革を主張しているようにみえながら、実際は、全問題に対する鍵は、余暇とみなされていることである。余暇を『新しい中心』にすることは、私たちもかなり容易にやれるようなことであるが、一方彼が暗示しているように、労働の再組織化は非常に困難である。二つのことが遂行されねばならない。その一つは短期間に比較的容易に実現できるもので、もう一つは長期間でずっと実現困難なものである。彼は、まず計画のうちの比較的やさしい部分に取り組もうではないか、と述べている。あいにくこうした見解は、計画のもっと困難な部分が無限に引き延ばされることを意味する。」（パーカー 1971）

余暇の変革が労働のそれと比べて容易かどうかはさておき、労働と余暇を「両方とも実際は同じ問題の側面」とみるパーカーにとって、両者の問題は同時に並行して対応・解決されるべき問題となる。パーカーは、このようなスタンスから職種や従業上の地位による労働者の余暇に対する態度の相違、例えば、余暇のあり方が職業的労働と密接な関係にある「延長」型と、労働からの断絶・逃避を特徴とする「対抗」型、その中間としての「中立」型の存在という観点から、労働と余暇活動の社会的な相関関係を検証していく。その結果、職種や地位の違いによる労働の創造的意識、熟練性、協働性意識、集団での役割等の違いが存在していることが、実証的に詳細に分析されており、かつその結果について一定の説得的

な普遍化が試みられている。分析の基本的な手法は同じであるが、主として階層性を軸に余暇の特性を論じたデュマズディエと比較して、より精緻な分析基準を立てながら詳細な議論が展開されており、余暇問題の解決と労働問題のそれが表裏一体であるという問題意識がさらに鮮明に展開されていると言えるだろう。²

以上、労働とレジャーとの関係という視点から、フリードマン、デュマズディエ、パーカーという3人の議論を概観してきた。改めて簡単に総括すれば、「細分化された労働」において人格の発展をもつばら自由時間に託すフリードマンに対し、労働問題とレジャー問題の一体性認識に基づき両者の同時解決を志向するデュマズディエ、パーカーという構図でレジャー論が展開されてきたことになる。そして、既述のように、フリードマンの議論の背景には19世紀来の歴史を踏まえたある種伝統的な労働観があり、当時の若手研究者であったデュマズディエとパーカーの議論には、「レジャー文明の時代」を想起させるようなマス・レジャーの急激な台頭という現実があった。彼らの実証分析は、オートメーションに支配される「半熟練労働者」にとどまらず、ホワイトカラーその他第三次産業に従事する労働者への注目が大きい。その現実、フォーディズムに象徴される「細分化された労働」過程よりは、資本主義の構造変化に伴ってすでに広範化しつつあった新しい労働市場とそこでの労働形態の発展により大きな関心が注がれているように見える。

しかし、「余暇はあきらかに労働過程の性格によって規制される社会的現象であるが、余暇もまた労働過程に影響を及ぼす」としつつ、「両者の作用が相まって全体的過程が成立する」とするデュマズディエの認識は、なお「あきらか」とは言えない。なぜなら、「全体的過程」の二つの側面としての「両者」の関係は、もつばら両者の相互「作用」として説明されているに過ぎず、両者がいかなる意味で「全体」として過不足のない二つの構成部分となっているのかの実体的な認識が明確でないからである。

この点では、パーカーも基本的に同じである。ただし、彼の場合には「両方とも実際は同じ問題の側面」というように、「同じ問題」が二つの「側面」を含んでいるという、表現上は機能面での相互作用という次元を越えて、より実体に踏み込んだ論理表現をしている。しかしながら、その上でこの表現に即して言えば、どのような実体として「同じ問題」であり、どのような意味において区別されるのかが問われるが、その点での説得的な説明は見られない。実証分析から導き出された満足度・嫌悪度の観点から見た労働のハイアラーキーが、レジャーのあり方を規定するという認識は、結局は作用あるいは機能的な側面からの労働・レジャー関係の把握にとどまる³。実体的な構成要素としての一体的関係（一つの全体の二つの構成部分における同質性と差異性の関係）とは何かについては改めて次節で論じることとして、ここでは今少し方法論上

の問題について若干のコメントを加えておきたい。

第1に、労働をそもそものように認識するのかという点である。フリードマンなど、労働改革の展望に悲観的な（あるいはデュマズディエから見るとレジャーの時代を正当に評価していない）伝統的な研究動向への批判が、労働の社会的意義を過小評価する認識と結びついていることである。たとえば、次のような叙述である。

「マックス・ウェーバーのプロテスタントの研究によれば、資本主義を建設、指導したものは、『利益を正当化するものは労働であり、社会の役にたたない活動は第二義的なもの』という理念であった。このような理想主義的社会観は、資本蓄積の必然性に関するリカードのテーゼにも一部みられる。マルクスも別の立場からではあるが、労働の根本的重要性『労働が人間の本質である』という類似的概念を提起した。しかし、マルクスやリカードの価値観は余暇の発展した今日、次第にゆらいできている。」（デュマズディエ 1962）

ここで、「利益を正当化するものは労働」であるとするウェーバーの「理念」は、プロテスタント的倫理の観点から資本蓄積の促進における勤労精神の意義を説き、その観点から「社会の役に立たない活動は第二義的」としたものである。これは、デュマズディエの立場から見ると、余暇活動を含む非労働活動に対する過小評価となる。

「マルクスやリカードの価値観」については、この叙述では明確でない。あえて推測すれば、ひとつには資本蓄積と商品価値の内容・大きさを労働量に基づいて説明する投下労働価値説に対する、あるいはマルクスについては人間の人間たる所以を労働に求める実践的唯物論に対する批判と取れなくもない。しかし、そうした議論が「ゆらいでいる」根拠を「余暇の発展」に求める説明は論理が大きく飛躍している。とくにマルクスについて言えば、自由時間は人間にとっての「最大の富」と言うほどにその位置づけは大きく、むしろデュマズディエの評価は180度転倒している。こうした表現にも示されているように、端的に言って、彼の労働観はきわめて曖昧である⁴。

第2に、デュマズディエは、主として労働の相違・変化を社会的階層の相違を基準として把握しつつ、それぞれにおけるレジャーのあり方を調査・分析し、労働とレジャーとの関連性を把握しようとした。このことが重要な視点であることは確かであるとしても、「労働過程の性格によって規制される社会的現象」として余暇を認識しようとする以上、労働過程の歴史的变化が余暇のあり方に及ぼした作用という視点（歴史的視点）、および労働が「職業労働」として現れていることに起因する余暇の変化という視点（賃労働視点）との統一性・整合性を欠くと、彼の壮大な意図にもかかわらず、その分析と処方箋の提示は表層レベルにとどまることになるだろう。

レジャー活動が人間の生命活動において、きわめて重要な

位置を占めつつあるのはデューズディエの主張のとおりであろう。しかし、「ゆらいできている」のは、労働の重要性ではなく労働に対する一面的な認識や固定観念であって、この点の取り違えがデューズディエの議論を根本的に制約している。そして、パーカーもまた、こうした観点を踏まえた、あるいは越える議論を展開することができていないと言わざるを得ない。

2. 新自由主義・グローバリズムの時代

これらの議論が出そろった1970年代半ば以降、労働・レジャー関係論としてのレジャー論も大きな変化を遂げる。この変化について、ヴィールは次のように概括している。

「(労働と余暇との一引用者) 関係性は、1970年代の初頭には重要だった。なぜなら、レジャーは、研究の比較的新しい分野であり、新しく発見された『社会問題』だったからである。そして、西側社会において個人の『中心的生活関心』として、レジャーが労働に取って代わるかもしれない可能性が、活発に議論されていた。労働時間の減少と余暇時間の増加という西側社会における数世紀にわたる傾向が反転し、多数の人々が『時間の圧縮』や『板挟み状態』そしてそれに伴う健康と幸福へのストレスや脅威という現象を経験し始めるにつれて、1990年代には再び中心問題として現れることとなった。／労働・レジャー関係という共通の関係性にもかかわらず、それゆえ、二つの時期には違いがある。1970年代には、労働・レジャー関係は、豊かなレジャーの出現によって引き起こされた諸課題のために前面に押し出された。しかし1990年代および現在では、中心となる課題は少なくともある人々にとってはレジャーの欠乏の出現となっている。二つの時期におけるさらなる相違は、その間に新しい理論的な洞察と相当な実証分析のプログラムを含めて、労働とレジャー研究に関する顕著な進展が見られたことである。理論的な観点の領域と描くべき経験的な根拠の量は、それゆえ相当に変化した。」(Haworth & Veal 2004)

このように、産業社会から非産業社会(サービス経済社会等)への転換、グローバリズムなど、資本主義および労働市場の環境・構造が大きく変化する中で、労働・レジャー関係論が扱う領域もまた理論・実証両面で大きな変化を余儀なくされていく。全体として労働の内容が顕著に変化し、それに伴ってレジャーとの関係も変化を余儀なくされる状況の出現は、論理的には、それまでの労働・レジャー関係論を、実体的な本質論か、現象的な機能論のどちらの方向にも変化させる契機となりえるものである。しかし、ここでは結論的に言って、前者の方向への理論的深化はなされず、もっぱら「新しい理論的な洞察と相当な実証分析のプログラムを含め」た「労働とレジャー研究に関する顕著な発展」は後者の世界に限定されているように見える。

一例をあげよう。ヴィールは、新しく注目を浴びるようになってき

た家事労働やボランティア活動について次のように述べている。

「通常、労働は賃労働と考えられている。しかし、1970年代半ば以降のひとつの重大な変化は、『労働』が賃労働にとどまらず、家事・育児労働とボランティア活動のある部分をも含んだものであることが強調されてきたことである。」(同上書)

ここでヴィールは賃労働だけでなく家事労働などが「労働」範疇に加わったことに注目しているわけであるが⁵、だとすると労働とは何かについての根本的な再検討があってもおかしくはない。しかし、彼の研究に限らず、一連の労働・レジャー関係論の観点は基本的に変化していない。

ロジェック等は、ポスト産業社会論やポスト・フォーディズム論を、カルチャー・スタディーズの観点から積極的に展開し、そのこととの関連でレジャーの変化の分析を試みている⁶。しかし、そこでも労働とレジャーとの関係は、両者における様々な現象の諸断片を機能的に結び付ける分析の枠組みを超えていないように見える。このことの具体的な意味は、本稿の後半部分で明らかにしたい。

3. 日本のレジャー論

パーカーの著書の翻訳者である野沢は、1970年代初頭当時における日本のレジャー研究の状況について次のように述べた。

「わが国の最近の時短ムードや労務管理論や余暇などが、労働過程の考察を捨象したままで一面的に余暇の導入手法だけを説いたり、余暇イコール娯楽と理解しながら専ら風俗としての娯楽だけを扱ったり、時短の功利的な効果のみを浅薄に宣伝することで終ったりしている状況をみつめていると、労働との相関関係を忘却したこのような時短談義や余暇論は、どうしても批判せねばならないのである。原著は、このような批判のための足がかりを与えてくれるだろう。…きわめて哲学的な洞察に貫かれた概念構成の仕方は、情緒や無原則に流れやすいわが国の時短議論や余暇論に対し、論理的にはかなり鋭い刺激となるはずのものである。」(野沢 1971)

日本のレジャー論に対する野沢のこのような評価は、管見の限りでは今日においても基本的に妥当するように見える。「論理的にはかなり鋭い刺激となるはず」という野沢の期待にもかかわらず、現実的にはそうはなっていないのが実情であろう。なぜそうなのかということもまた興味ある問題であるが、ここではその点への深入りはせずにひとつの象徴的な傾向だけをとりあげておこう。それは、日本では、レジャー研究の側からではなく、労働の管理に実践的に日々直面する経営側(学術的には「人的資源管理論」等の領域)から労働・レジャー関係の変革に関する踏み込んだ問題提起が行われていること

である。通産省（当時）が監修し（財）余暇開発センターが編集したレポート『時間とは幸せとは—自由時間政策ビジョン』はその典型例のひとつである。

非常に興味深いことは、本レポートでは自由時間は労働を含む「すべての時間」に関わるものとして把握され、「豊かさのための労働から幸せのための労働へと目標が変化する中」で、「遊び」と労働の同質化を基本認識として強調している。

「人間にとって遊びは、まじめとふまじめ、あるいは善悪の対立を超えた根源的な生の範疇であり、社会や法を生み出す原動力である…。このような意味で『楽しみとしての労働（play）』は、ふまじめな仕事の仕方を意味しているのではなく、より生の根源に近いところで仕事をしようとする方式を指していると考えることができる。」（財団法人余暇開発センター 1999）

労働と遊びを「根源的な生の範疇」とみるこのような認識は、一見、既述のマルクスの人間＝労働観と同じように見える⁷。しかし、あくまで資本・賃労働関係を前提とする次元でその可能性を論じている点で、内容的には根本的な相違がある。

「自由時間の旧定義は、管理社会的生活の強い社会では有効である。なぜなら、そうした社会では余暇の中でしか自由を得られないからである。余暇時間こそが自由時間であり、両者は同義であった。／ところが、労働や教育、家事やケアといった活動自体が自由に選択でき、また自由にデザインできる社会では、それらの活動の時間が自由時間ではないとはい切れなくなる。」（同上）

つまり、これまで労働＝被管理・義務、余暇＝自由として特徴付けられてきた社会は、今日では労働の中にも自由があり、自由の中にも管理があるというように、その境界線が相対化されてきているとする。これは、人間のあらゆる活動を横断して、幸せとそれ以外を区分する基本的な指標を、時間と活動に対する自己「管理」の有無におく立場である。そして、ある条件が整えば労働の自主管理的側面が強まり、労働における自由が広がることによって労働と余暇の同質化が実現すると見ているわけである⁸。この認識の限界については後述するが、ここでは、今日の労働の場においては労働者の自由や主体性の実現が重要な課題となっていることから、本来の自由時間におけるレジャー活動との関係を把握することが、経営サイドの切実な問題意識を喚起している事実に注目しておきたい。

II. 労働・レジャー関係の分析視角

1. 労働とレジャー活動：その本質的同質性と差異

現代社会に生きている人間から見ると、労働と言えはまず賃（金）労働を思い浮かべる。一般的に言えば、この社会では、

労働力を売らなければ（＝雇われなければ）生きていけないからである。しかし、人類史をさかのぼるとこのような生き方はきわめて特殊であることがわかる。300 万年を越えると言われる人類史の中で資本主義社会が成立し労働が一般的に賃労働として現れるのはたかだか 200 年超、300 年だとしても人類史の 1 万分の 1 に過ぎない。歴史の大部分を占めていた原始（共産制）社会には賃労働は存在しない。

そうした人類史の大部分の時代において人間が他の動物と区別されるのは、それが労働する動物であるということにある。

「労働が多くの人びとの生活の中で、フロイトが正しくも認めたような重要な役割を演ずることができるのは、労働が本質的に人間的な、創造的な活動であるからで、このことによって人間は他の動物の種と区別され、同時にその上に立つものとされるのである。日ごとに効力をます道具を用いて人間が自分の環境をかせ、その結果、さらに（よい方向にも悪い方向にも）自分自身をかせていくのは労働によるのである。人間がその生存の手段を生産したときから、人間を生物的な寿命から脱却せしめ人間の歴史を特徴づけ、その変遷を説明し、その深い原動力となったのは労働である。」（フリードマン 1956）

人間以外の動物も生きていくためには食料を調達したり巣を作ったりしないといけないが、そうした行為を労働と呼ぶことはない。なぜなら、労働という生命活動においては、目的としての労働の結果があらかじめ意識されている。人間は、目的に向かって自分自身のあり方を含めて（対自的に）目的達成に必要なと思われる手段・対象を統合する実践的行為として生命活動を展開するからである。

この場合、人間をこのような実践に駆り立てる駆動力は、種々の目的として顕在化する生命欲求の存在である。と同時に、目的の達成のために統合されたあらゆる媒介的諸契機の実現もまた欲求の一部（副次的欲求）を構成するようになる。欲求それ自体が、欲求体系として現れるということである。そして、このような欲求が達成され発展していくことの中にこそ人間の幸福があり、人間的自由と解放、諸能力を含む人格的發展の実体が存在する。

労働とは、こうした意味内容において、生産手段（労働対象・労働手段）に働きかけて自分自身の外部に生産物を作り出す実践、その意味で、主体の外側に存在する環境を変革しようとする「外的目的性」を有する実践であると言える。これに対して、逆に自分自身の再生産・創造を目的とした実践、すなわち「自己目的性」を有する実践が存在する。これは、外側に存在する客体・成果を主体の内側に取り込むことによる生命再生産・自己開発を目的とする対自的な活動——一般的には労働ではなく消費として認識されている活動であるが、人間の生活は、こうしたものとして、労働と消費の循環のプロセスとして描くことができる。

この点を踏まえて、実践の目的が、自己の外側にあるか自分自身=内側にあるかという点で、前者を「外部化生命活動」、後者を「内部化生命活動」と呼んでおくことにしたい⁹。言い換えれば、ある主体にとって外への働きかけを目的とする実践が外部化生命活動であり、自己への働きかけを目的とする実践が内部化生命活動である。一般的に言って、人間の実践は、外部化生命活動で生産・創造した成果を内部化生命活動において享受（消費）する。その意味で、人間の全生活過程は、外部化生命活動と内部化生命活動との統一である。人間を人間たらしめている理由が何よりも労働にあるという点では、外部化生命活動こそが本源的であるが、それぞれが前提であり結果でもあるという点で両者は相互補完的であり、内容的に相互規定的でもある。

さらに、これらの目的意識的な過程が人と人との連携・共同を通じて遂行・実現されることが、人間の生命活動のいまひとつの本質的要素をなす。ゆえに、労働する諸個人が有する自己意識は、本質的に社会集団・共同社会を構成する他の諸個人との関係において成立するという意味で、個別的であると同時に社会的である。比喩的に言えば、人間は、他者との関係構築において、目的を達成する喜びは倍に失意・苦痛は半減することのできる存在である。

ここで、本稿の議論と関わって重要なことは、素材的内容としての実体においては、労働とレジャー活動との間に原理的な差異が存在しないことである。なぜなら、レジャー活動もまた外部化生命活動か内部化生命活動のどちらか、またはその統一としての実践活動に他ならないからである。既述のヴィールの議論に引きつけて言えば、「家事労働」は賃労働ではないが、たとえば実体として見れば料理を作るという実践（外部化生命活動）である。この実践をレストランで雇われて行えば賃労働である。この意味で両者は、人間の実践活動という同じ本質を有する二つの異なる形態である。

資本主義以前の時代においては、労働と余暇との区別が基本的に存在しないか不明確であったことは多くの論者が指摘しているとおりである。たとえば、デュマズディエは次のように述べていた。

「古典時代以前の社会では、労働とあそびとは、人間が父祖たちの世界に参加する手段としての祭りのうちに統合されている。この労働とあそびとは、たとえその実生活上の目的がどれほど違ったものであれ、共同体的社会の生活の核心において、その重要性について変りはない。祭りは、労働とあそびとをふくめている。そのうえ、労働とあそびとは、往々にして混合している。両者の対立は小さなものか、あるいは存在しないかである。」（デュマズディエ 1974）

この両者が渾然一体となっていた社会が資本主義化されると共に、つまり賃労働が成立すると共に、生活過程は労働（＝

賃労働）とレジャーに、労働時間と自由時間に分裂する（川北 1987）。労働とレジャーとが同じ一つの実体の「コインの表裏」として現れるためには、そこに一面では上にみえてきたような実践=生活過程としての本質的な同質性がなければならず、他面では形態においてこれを分離する歴史的な差異性が認識されなければならない。

2. 賃労働における人間的欲求の発展と疎外

このように見てくると、労働それ自体は目的意識に沿った自由な実践活動であることがわかる。この労働に対置される形で自由な実践が、したがってまた労働時間に対置する形で自由時間が現れるということは、労働そのものが非自由あるいは不自由な実体に転換していること、すなわち労働者自身から疎外されるようになったことを意味する。現代社会における労働は、既述のように一般的に賃労働である。労働が賃労働として現れることは、以下の意味においてこうした変質を内包している¹⁰。

第1に、労働の成果たる生産物からの疎外である。労働の目的は、本来的にその成果物の取得と消費にある。しかし、賃労働の場合には、労働者が得るものは賃金であって生産物ではなく、その意味で生産物に対する支配を喪失している。

第2に、そのような結果になるのは、そもそも労働過程においてすでに自らの労働そのものに対する支配を喪失しているからである。労働時間や作業内容など労働に対する管理は、自己とは別に存在する労働過程の管理者（経営者）が利潤追求（剰余価値の実現）の観点からこれを行う。これに伴って、管理される分労働者の自由と自発性が失われる。前掲の通産省レポートが、自由を自主管理との関係において論じる所以である。

第3に、労働過程における社会的共同は、企業内分業・協業として形成されるが、それは合目的的共同に基づく自由な労働としての本質を喪失し、もっぱら個人の生命再生産を目的とした受動的な（その意味で不自由な）、余儀なくされた共同労働として現れる。

第4に、社会的分業の発展は実体として労働と生活における共同性の深化に他ならないが、その社会的共同性は、市場を介したモノとモノとの物象的な関係として、三面競争（売り手どうし、買い手どうし、売り手と買い手の競争）における利益相反の敵対的な関係として現れる。社会が敵対的な他者として自己に対峙する。

こうして、＜ある特定の欲求→目的に沿った自律的管理の下での共同的労働→成果の獲得＞といった、人間の生命活動の一貫性・循環性は分断される。それだけ労働は、人間的自由の実現にとって疎遠なものとして現れる。言い換えれば、賃労働として具現化される労働は、自由な生命活動の発現ではなく、拘束された関係の中で、生きていくための余儀なくされた手段として現れる。「類的存在」としての普遍的な自己

意識に、賃労働者としての実践が生み出す特殊歴史的な自己意識が対立するところの「自己疎外」が常態化する。

ともあれ、以上のような実体を有するものとして現代の労働と労働時間が現れてきたが、それは個々の生命活動の全体、すなわち 24 時間を占めるわけではない。労働が賃労働として分離したために、これとは異なる実体を持ち、時間的には競合関係にある非労働・非労働時間がメダルの裏側として定立される。あらかじめ言うておけば、両者は対立物として統一されており、基本的・一般的には前者（賃労働・労働時間）が後者（レジャー活動・自由時間）のあり方を規定しつつ、後者もまた前者のあり方に反作用する関係がそこにある。

ここでなぜ賃労働が規定的かという、第 1 に労働力を売って生活していかなければならない資本主義社会では、好むと好まざるに関わらない普遍性を持つということ、第 2 に、賃労働を通じて社会的分業の一環として実証される関係にある以上、社会的アイデンティティを形成するための基幹的なルートとなるからである。労働遂行上の諸課題との格闘は、それらをこなす能力獲得に対する欲求を生成し発展させるとともに、その内容がレジャー活動のあり方にも反映される。この逆の関係も当然起こり得るわけであるが、多様なレジャーの形態を基準に労働への作用を具体的に検証することは困難が大きい。デュマズディエやパーカーが、両者の双方向性を強調しながらも、実際の分析においては主として労働内容の差異を基準としてレジャー活動へのその反映を把握しようとしたのはそのためである。

さらにこの作用は、それが人間性と能力の発展であるとともに疎外の発展でもあることから、基本的には二種類のストレスを生み出す。ひとつは、建設的な欲求の「実現」を志向するストレス（「快ストレス」）であり、いまひとつは疎外に対して対抗的な発散志向型のストレス（「不快ストレス」）である¹¹。自由時間における自由な実践活動は、社会的にみて程度・濃淡の差はあれこの両面のストレスを伴う諸活動から構成されている（セリエ、1984）。

自由時間が非労働時間のすべてを占めるわけではないとしても、拘束された労働に対しては、何よりも自由な実践としてのレジャー活動こそがその対極をなす要素であり、したがってレジャー活動の意義は、そのような人間の生命活動＝実践活動の全体的な関係の中で把握されなければならないのである。

Ⅲ. 階級関係の形態変化と労働・レジャー関係の変容

1. 労働の変化と欲求の現代的形態

上述のように、ヴィールは家事労働やボランティア労働等に注目していたが、現代の労働におけるもっとも基本的な変化は、ガルブレイスの「テクノクラート」やドラッカーの「知識労働者」論に象徴されるような賃労働そのものの変化である（ガルブレイス 1977、ドラッカー 1993）。強制され、「細分化」され、疎外に覆われていたはずの賃労働は、いまや希望と革新に満ち

た新しい労働としての知識労働や管理労働に格上げされた¹²。これらの議論に懐疑的な眼差しを向けるとしても、資本所有と経営との分離が見られる形態となり、経営者層もまた雇われ経営者—その限りで賃労働者—化した今日の事態は、資本・賃労働関係を、したがってまた賃労働概念それ自体の再検討を迫るものとなった（Wood 1988）。こうした変化は、サービス経済化やホワイトカラー化¹³の中心的内容をなすものであるが、簡単に言って肉体労働中心から精神労働中心への労働の変化、後者の内容においては管理（マネジメント）労働が全体をリードする中心的な労働形態となったことに集約することができる¹⁴。ここでは、資本家による労働者の支配と言った単純な階級支配の構図が崩れ、多様に分岐した複雑で階層的なハイアラキー型経営組織が現れる¹⁵。ロルドンは、次のように述べる。

「…支配の状況はマルクスが分析した二極的対立関係が示唆するものよりも複雑になっている。なぜなら、所有者＝経営者と現場監督に指揮されたプロレタリア大衆との対峙を、加速的に変化する企業構造が凌駕しつつあるからである。この企業構造の変化は労働分業の深化と内部的な特殊化によって生じた。そこでは序列体系の鎖列が媒介的次元において絶えず増大し、中心的な支配関係を無数の二次的支配関係に分化する。鎖列のそれぞれの次元において、隷属させる者＝隷属する者という両面的様式に則って賃労働関係に影響をおよぼす作用因が機能する。なぜなら、そこでは人はひとりひとりが命令の下に置かれると同時に人を命令の下に置くからである。かくして、ひとりの支配者（あるいは少数の支配者）と被支配者大衆が対立するという規範的關係形態は崩れて、支配が一種の連続的な勾配を描く錯綜した依存の序列体系となる。」（ロルドン 2010）

労働とレジャーとの相互関係を論じる上で重要なことは、こうした組織の中において賃労働者にとっての課題はどのようなものとして現れ、それを遂行する上でどのような能力が求められ、したがってどのような欲求が生まれ発展するかということである。

ドラッカーは、知識労働を「高度な専門職」として捉えたが、「医師、聖職者、法曹、科学者」などの伝統的なプロフェSSIONナルにとどまらず、三輪によれば、現代では次のような内容を持つ労働がこれにあたるとする。

- 「① 企業などの組織に勤務し、新製品や新技術の研究開発に従事する研究者や技術者
- ② ソフトウェア技術者、経営コンサルタント、各種のアナリスト、プランナー、プロデューサーなど。近年急激に増加した新興専門職
- ③ 企業などの組織の中で経営企画や事業創造に、あるいは

は各職能部門における企画や分析、問題解決に従事するマネジャー、およびホワイトカラー

- ④ 主として定型的な作業やサービスを行いつつも、作業の改善、設備や作業 システムの保守・保全などの知的な業務にも従事し、一定の判断力が必要とされる作業労働者」(三輪 2015)

この分類に従えば、現代の賃労働者の多数者は③や④であり、とりわけマネジメントの中心的な担い手である③のあり方が各種組織の活動を牽引するものといえよう。望田・大西は、少し別の角度からこうした時代状況を「個性の生産力」の時代への転換と捉えている。

「19 世紀末の工業化がそれまでの封建的な『熟練の生産力』を解体し、そこでの生産力の主要な源泉は『機械』となる。そして、そうした『機械』と『機械体系』による画一的企画の物財の大量生産とそれにとまう資源の大量消費の時代を招来した。そこにおける働く人間の労働は、機械化による肉体労働の軽減に恵まれつつも、主要には不熟練化された単純労働であり、またどうしても男性労働が中心とならざるを得なかった。以上のような意味で 19 世紀末は、『機械』がその時代の生産力と労働のあり方を決める 時代、いわば『機械の時代』であった。／これに対して 20 世紀末の工業化は、その技術革新においてコンピューターやロボットの出現に象徴されるように機械による人間頭脳の代替にまで進展したが、それとともに情報化システムの巨大な発達をもたらした。そこにおける働く人間の労働は、消費者の多様化し高度化した欲求に応える商品生産となり、そのために斬新なアイデアとセンスを発揮することを要請されるようになった。ここに青年や女性の感性やセンスを尊重せざるをえない状況が生みだされてきたのである。以上のような意味で 20 世紀末は、その生産力的基礎を『ソフト』=『個性の生産力』におく時代、といえよう。」(望田・大西 1992)

つまり、これらの議論からは、「斬新なアイデア」を生み出す「感性やセンス」を備えた「個性」的な労働者と、現場のプロジェクト型業務や日常業務において、これを制御し組織的に方向付けするマネジメントの担い手という現代の期待される労働者像が浮かび上がる。だとすれば、それを管理する立場の労働者には、必要な課題とそれをとりまく状況を理解する能力、上位の管理者の理解を取り付けながら、部下に対して「個性」を尊重しつつこれを一定の方向性に集約し説得するコミュニケーション能力が日常不断に求められることになる。しかも、前述のようにこれはピラミッドの頂上から裾野まで、組織の各階層が遭遇する状況である点で、現代の労働過程を特徴づける普遍的な状況なのである。

2. 疎外の現代的形態

労働過程の変容は、これが賃労働として現れることとの関連で現代特有の疎外状況を生み出す。

第 1 に、こうした構造の中では、自らのマネジメント欲求が、最上位に連なる上位の方向性と矛盾しない場合には、現代の賃労働者はその実体と位相に応じて経営組織との一体性を意識することができる。換言すれば、賃労働者は多かれ少なかれ、資本家（経営者）的意識を持つことができる。管理労働と所有を結びつける限りで、「ストック・オプション」の広がりもまた、こうした傾向を助長するであろう。この事情は、階級意識や労働組合の弱さ一総じて労働者の保守化一に反映される。しかし、同時に指摘しなければならないことは、組織の目的との間に齟齬が生じる場合には、不断にあるいは突然に管理からの疎外に囚われることになる。このことは、状況によってはほとんど最上位に近い部分まで労働疎外が顕在化する可能性もまた存在することである。その境界は固定的なものではなく、かつてなく流動的であるが、交換価値原理が支配する限り、結局は疎外自体の発生から免れることはできない。既述の余暇開発センターレポートには、この点の認識が看過されている。

第 2 に、労働の成果が物として現れる場合には、資本主義社会では人と人との社会的関係は、商品流通を介した物と物との関係として現れる。ところが、サービス労働や管理労働が支配的になるに伴い、対顧客の局面においても、経営組織の内部においても、人と人との直接的な関係のあり方が大きな役割を演じるようになる¹⁶。こうした事情は、コミュニケーション能力の発達を以前にも増して社会が要請し現実にもその発展を促すのであるが、反面でこのプロセスが利潤実現の手段として交換価値の原理に強制される形で現れることから、コミュニケーションにかかわる各種の人間疎外を顕在化させていくことになる。労働過程における各種ハラスメントの増加、またホックシールドが「管理される心」として描いた「感情労働」¹⁷の商品化に伴う疎外がその典型例である。

第 3 に、サービス経済化の下「知識労働」が広範化する現代は、一方でグローバル競争にさらされる大競争時代でもある。この点では、ヴィールが指摘したような労働時間の増加（余暇時間の減少）、また不安定雇用や失業の増加による貧困の拡大という、レジャーの発展を阻害する要因が発展する時代でもある。労働時間の減少に代わってオーバーワークが（Schor 1993）、所得の増大に代わって貧困が広がる、労働時間の減少と消費手段の豊富化を基盤とした「余暇文明の時代」はそれだけ色褪せたものとなった。

第 4 に、市場原理は、本来個人の自由な世界であるべきレジャーにも浸透する。レジャーに関わる情報操作やレジャーのための消費手段の商品としての供給を通じて、一見自由なレジャー活動が、事実上は市場原理に誘導される側面を強める。消費手段の商品としての怒濤のような供給の結果、消費

者がそれを手段として利用する関係から、消費者の行動が手段にコントロールされる転倒した関係が常態化する（バックワード 1960、1978）。ロジェックは、ショアの議論に依拠しながら、ポスト・フォードイズムの時代における消費生活の疎外について次のように述べている。

「ショアの研究は、消費文化において疎外の二重の束縛を示唆している。第1に、消費者は消費者文化が触発するすべてに加わろうとして、もっと稼ごうとする際限のない欲求に引きずられ、自由時間欠乏の不満を経験する。第2に、労働者は現実と欲求との乖離を永続化する消費者文化から基本的に疎外されている。」（Rojek 2004）

別の言い方をすれば、資本主義は労働者の所得を労働力再生産費に押さえ込むが、常に浪費が刺激される今日の時代は、自由時間の欠乏と消費欲求の現実からの乖離という二重の疎外にさいなまされるということである（頭川 2010）。

第5に、こうして労働過程にとどまらず消費生活もまた疎外に浸食されるとすれば、いまや疎外は労働者の全生活過程・全人格に関わるものとして現れる。これは、自分が自分であって自分でない状態、類的存在としての共同性を確証できない「無縁社会」の出現、簡単に言って人間疎外の全面化を意味している。別言すれば、主体性の一般的喪失によるアイデンティティ・クライシスの蔓延と言ってもよい。

3. 今日の労働・レジャー関係

(1) 労働経験および疎外体験の中で生じる欲求のレジャー活動への投影

こうした社会的構図から、基本的に次のような労働者の欲求パターンを描くことが可能であろう。

第1に、置かれる状況・課題に関する一定の専門的知識の獲得欲求、課題の流動性に対応可能な汎用的知識とジェネリックスキルの獲得、柔軟な発想を生み出す「感性やセンス」を備えた「個性」的な人間でありたい（になりたい）という欲求が、多かれ少なかれレジャー活動にも投影される。

第2に、第1の欲求とその成果とも結びつけながら、不断のマネジメント活動や「感情労働」の実践は、他者の考え方や発想、感情の表し方を理解したい（理解できる能力の獲得）欲求と、自分の知識や考え・発想を的確に説得できる表現能力の獲得に対する切実な欲求を発展させるため、レジャー活動においてもそうした欲求の充足が意識的・無意識的に求められるようになる。

第3に、グローバル化された現代では、とくにコミュニケーション・ツールとしての外国語の習得と外国事情・異文化に対する知識獲得・異文化交流の欲求が高まり¹⁸、社会的経済的諸条件の発展と相まって、実際にそれを五感で体験しようとする（単なる「物見遊山」とは異質な）ツーリズムへの欲求¹⁹

が高まる。

第4に、これらの欲求が十分に満たされなかったり阻害されたりすることから累積する「不快ストレス」の発散欲求である。ここで、「不快ストレス」の累積が不可避となるのは、主要には次の事情によって規定されている。すなわち、組織が持つ利潤（交換価値）原理の圧力は、しばしば「感性やセンス」が求める使用価値原理に基づく欲求と衝突する。換言すれば、私的経営である以上、企画や事業は実際の利益に繋がらなければならない。昇給など金銭的インセンティブによる補償にも限界もある中で、上位の管理者は、下位の労働者に対しては、「個性」の最大限の発揮を期待しながら、組織的な効率性を高めつつ利潤原理と両立させるという難題として現れる。上位の管理による下位の主体性の抑圧は、相対的に下位の労働者において賃労働者としての疎外を突然かつ不断に顕在化させる機会として現れるのである。また、これ以外にも、女性の労働市場への進出に伴う労働の場面でのジェンダー問題の顕在化は、「女子会」での「ガールズ・トーク」への欲求を高めるなど、個別の労働疎外の発展は、ストレス発散型・補償型のレジャー活動への欲求を強めることになろう。

第5に、こうした機会への参加自体が多かれ少なかれ阻まれている不安定な労働者層においては、相対的に高い労働市場の流動性が「細分化された労働」への固定性とそれに伴う欲求内容の固定化を緩和する側面も顕在化させるが、労働疎外との日常的な格闘とそこでのストレスの累積が、さしあたりは強く制約された所得と両立可能な発散型・補償型の欲求に作用することになろう。

第6に、生活全般における自己疎外からの脱出を意識的・無意識的に志向した人間的なコミュニケーションの実現、アイデンティティの再生・確認欲求である。しばしば中毒症状を呈するSNSを介した他者とのつながりの実現欲求などがレジャー活動に反映される²⁰。

現実には、これらの諸状況がレジャー活動の具体的な形態を単純かつ直接的に規定するわけではなく、あくまでレジャー欲求の一般的な背景として複合的・錯綜的に作用していくことになろう。ここで言えることは、「フォードイズムの時代」「機械の時代」との対比において、量的・質的に異なる新たなレジャー活動の欲求が必然的に顕在化しつつあるということである。要するに、一方で、欲求の多様化・高度化として概してポジティブに表象される様々な事実、あるいは「体験型」、「学習型」、「交流型」、「創造型」と言われるような近年のレジャー活動の背景にこういう労働過程の新たな展開があること、他方で、それがやはり賃労働として実践されている結果自己疎外を浸透させ、それに伴う不快ストレスの蓄積が発散型・補償型の欲求をも平行して発展させるということである。

(2) レジャー活動の変容が労働のあり方に及ぼす影響

自由時間における活動は、消費の商品化に伴う疎外を多か

れ少なかれ被るとしても、基本的には自由な意思決定に基づいて、上位の管理者による拘束を受けない状況下で行われる。言い換えれば、交換価値原理による支配はそれだけ弱く、使用価値原理による実践という性格がそれだけ強い活動として存在し得る。このこと自体は、資本主義を徹底して妥当する状況であるが、現代におけるレジャー活動は、上に述べたような労働過程とそこでの欲求の発展を反映してはるかに高度化・多様化しているだけでなく、人々の生活過程における意義・役割を格段に高めていることである。言い換えれば、単に労働過程を補完する文字通りの余暇ではなく、場合によっては生活の主要な目的・生き甲斐としてすら現れる場面となるということである。

自由なレジャー活動において、こうした体験・経験を多かれ少なかれ蓄積した労働者は、それだけ疎外状況に反発する感性を備えた状態で労働に従事する。言い換えれば、労働は、程度の差はあれレジャー活動との比較において実践される。このことが、労働に「生き甲斐」「やりがい」への期待を不断に強めるであろうことは想像に難くない。さらに、労働の外側では多様な欲求の体験は、労働の場での欲求を相対化・部分欲求化し、その分労働過程で必要とされる個別課題への集中を妨げる作用を伴う。経営組織は、今では労働者をなによりもその個人の欲求に基づいて統合しなければならないにもかかわらず、労働者の欲求の多様化が組織的統合と衝突するというディレンマが生まれる。こうした事情は、適切な「人的資源管理」が失敗する可能性を、したがってまた、労働者が賃労働者としての階級意識を強化する可能性を高める。こうした意味で、経営組織にとって、労働者の「個性」化は、必要かつ必然的なベクトルであると同時に、諸刃の剣でもある。現代ではパーカーの時代とは異なり、このような意味内容において「労働問題と余暇問題はメダルの表裏」なのである。

おわりに

時間的な競合・補完関係においても、内容的な相互関係においても、レジャー活動は生活過程全体の不可欠な構成部分として、したがってまた賃労働との関係において認識される必要がある。一般的に言って、相互に依存した二項対立の関係にあるものを、その一方だけを孤立して取り出すことによってその本質を認識することは不可能である。

レジャー活動そのものは賃労働という形態をとらない自由な生活過程（外部化生命活動 or/and 内部化生命活動）であり、そういうものとして賃労働と並ぶ人間の生命活動における基本的な構成要素であった。この点での同質性を前提として上で、両者の差異と相互関係・相互作用という視点を有してこそ、今日の資本主義の下での労働過程の変容・発展が生み出す欲求、新たな労働疎外とこれをベースに生み出されるレジャー活動の領域をも含めた人間疎外・自己疎外が生み出す欲求の変容・発展の基本的な構造を認識することが可能と

なる。労働・レジャー関係の今日的位相は、この領域が人間的自由の獲得という課題にとってきわめて本質的な理論的・実践的課題であることを示している。

注

- 1 念のために言えば、睡眠などのいわゆる必須的な生活行為について、本稿において特別の注意を払うことはしない。本稿の課題はあくまで人間の主体的で能動的な活動にあるからである。ちなみに、4本柱のベッドで寝ることや違った環境で珍しい料理を食べることも主体的な選択であるように、主体的な活動と必須的な行為との区別もまた相対的であり、むしろその融合にこそ人間的特質がある。
- 2 パーカーは、本書を刊行した12年後の1983年に、その後の展開や議論を踏まえた新たな著作として『余暇と労働』を出版しているが、議論の基本的なスタンスに変化は見られない。
- 3 「結局のところ、彼（パーカー—引用者）はレジャーを統合、反対、あるいは中立かどうかという労働の『機能』として説明しようとしている。」（Clark & Critche 1985）
- 4 マルクス『剰余価値学説史Ⅲ』。なお、別のところでは、デムズディエもまた「労働は人間の第一次的欲求である」と述べている。（デムズディエ 1974）
- 5 ちなみに、このことは、彼が労働とレジャーとの差異の基準を、必ずしも賃労働においていないことを示唆している。さらに言えば、一口に労働と言っても、英語の文献では work と labour で意味が異なるだけでなく、論者によってもニュアンスが異なり、そのことが議論を錯綜させている面があるように見える。これに関わる翻訳の難しさについては、日高（1960）を見よ。
- 6 例えば、Rojek（2010）や Clark & Critcher（1985）。
- 7 尾関は、「マルクスの思想は、あらゆる人間活動を「労働」へと収飲させていくようないわば労働一元論的な思想とは無縁である」として遊びとの同質性を論じている。（尾関 1992）
- 8 自主管理の徹底という点を論理的に突き詰めると、このことは市場経済と雇用労働を否定することに行き着くことになる。実際次のように、本レポートでは論点として、「貨幣経済循環」と「非貨幣経済循環」との関係にまで踏み込んでおり、「自由時間活動の非貨幣経済活動としての側面が今後ますます強化されよう」と予測している。
- 9 角田は次のように、人間の生命活動を「生命再生産活動」と「物質的生産活動」の二つに区分している。
「人間の生命活動は—引用者—生活手段を媒介として人間が人間に対象化する生命再生産活動と、生産手段を媒介として生産物に対象化する物質的生産活動とに分けることができる。」（角田 1992）
角田は、こうした説明に続けて、前者を「自己目的性」、後者を「外的目的性」と関連させて説明している。この点と同様の趣旨で本稿では「内部化生命活動」と「外部化生命活動」として捉えているが、「物質的生産活動」「生命再生産活動」という分類をしなかったのは、「外的目的性」を有する実践として管理労働やコミュニケーション活動の発展を考慮しているためである。
- 10 以下の整理は、マルクスが『経済学・哲学草稿』で展開した議論に基づいている。関連して、ブラウナーはこのマルクスの議論を念頭に置きつつ、工業化社会において賃労働者が体現する疎外を「無力性」・「無意味性」・「社会的疎外（孤立）」・「自己疎隔」の四類型において把握している（ブラウナー 1964）。また伝統的な「マルクス主義」批判の立場からのマルクスの労働論・疎外論については、有井（2010）、ポストン（1993）を参照されたい。
- 11 「暇つぶし」や「退屈凌ぎ」は、基本的には不快ストレスの蓄積を反映したものである。
「一定の、恐らくその時必要な又は可能な、労働に対して、気乗り

がしない時、その労働が免れることの出来ぬ課題であればある程、或いはその労働が唯一の許された可能な労働であればある程、暇つぶしと退屈凌ぎとの必要は大きくなる。つまり労働が欠如している時ではなくて、気の向いた労働が欠如している時に、之が必要になって来るわけだ。暇や退屈に苦しむといふことは抑々贅沢のように考へられているが、しかし実際は、労働が出来ないということは人間にとってこの上ない不幸と苦痛なのである。」(戸坂 1937)

- 12 「もしも社会の多数者が、少数者による富の生産と管理に服従させられた結果として人間性を喪失させられ、理性の進歩から遠ざけられてしまったならば、人類は富の管理の実態を知り、それを制御する力量を失ってゆくことになる。」(池上 1984) その意味で、管理労働への多数者の参加自体は、社会の進歩である。
- 13 ホワイトカラー化に伴う階級認識の諸議論については、大橋 (1984) を参照。
- 14 管理労働の社会的意義については山口 (1972, 1975) を参照。
- 15 知識労働を全体の関係の中で捉えることの重要性についてグラムシは次のように指摘している。

「『知識人』という用語の意味の『最大限の』制限はなにか。…もっとも広く見られる方法上の誤りは、この区別の基準を知的活動の内的本質のうちにもとめて、知的活動 (とひいてはそれらを体现している集団) が社会的諸関係の一般的複合のなかにあつて位置を占めているのが見いだされることになる関係体系 (sistema di rapporti) の総体のうちに求めようとしてこなかったことではないかとおもわれる。」(グラムシ 1975)

- 16 コミュニケーション活動は手段としてだけではなく、目的としても現象するようになる。社会の発達、精神労働の分離・発展として現れ、管理労働が広がるに伴い、コミュニケーション活動それ自体も、能動的で目的意識的な社会的活動として発展する。
- 17 ホックシールドのいう「感情労働」の発展をどう認識するかに関連して、経済学の立場からの議論が行われている。その中で、鈴木 (2012) は、「接客サービス」過程の特殊性として、資本・賃労働に顧客を加えた三極関係の存在を強調している。こうした関係の発展それ自体は注目すべき事象であるが、その認識に関しては以下の観点を踏まえる必要がある。

第 1 に、流通過程では、対面販売をイメージすればすぐにわかるように、こうした「感情労働」は普通に見られる現象である。さらに、生産 (労働過程) が流通過程を介して顧客・消費者からの何らかのリアクション (要望や圧力) を受けるということそれ自体も、普遍的な現象である。

第 2 に、サービス業、とくに「接客サービス」業の発展は、サービスを供給する労働が、しばしばその受け手=顧客からの直接的なリアクションを広範に伴う。このような場合には、サービス労働があたかも人間自身を労働対象とするような状況を生み出すのであるが、その経済的な実体は、生産物としてのサービス・機能の供給と、受け手によるその同時的消費である。

第 3 に、「感情労働」と言われている労働においては、コミュニケーション活動の役割が大きい。そこでの自己表現は、一般にあらゆるコミュニケーションがそうであるように、論理的な表現と感情的・感性的な表現の統一であつて「感情」に特化した労働ではない。さらに、「感情労働」は、管理労働を始めとする組織内活動および、顧客を対象とする「接客サービス」のどちらにおいても行われている実践である。そして、資本主義社会では、いずれの局面においても交換価値原理の支配に伴う軌轢が避けられない。

- 18 「コミュニケーションの人間的・民主的発展には、個性と共同性の十全な発展、すなわち、自己主張とともに相手の立場を推測・了解し、共感する力が必要とされる。より歴史発展の普遍的な立場からするならば、日本型コミュニケーションのみならず、欧米型コミュニケーションもまた、たがひの特徴を認識しつつ、それぞれの不十分さを克服してい

く過程においてとらえる必要があろう。異文化理解を踏まえたコミュニケーションの発展とは、白らのコミュニケーション・スタイルをより人間的なものにしていくことと深く相関しているのである。」(尾関 1995)

- 19 ツーリズムとは、端的に言えば非日常空間におけるレジャー活動である。マス・レジャーの発展を基盤としつつマス・ツーリズムがその上に躍り出てくる (前田 1995) ことになるのは、後者の発展が、交通手段とツーリストのアフォーダビリティの一定の発展に条件づけられているからである。概念としてみれば、レジャーはツーリズムを包摂するが、現実の自由な活動は、レジャー活動から空間の制約を取り払っていくことを通じて、レジャー活動の内容にそれまでには見られなかった質的な高度化と社会的インパクトをもたらしてきた。

非日常空間がレジャー活動の対象となるのは、第 1 に空間が非日常性そのものによって鑑賞や体験の対象となるからである。第 2 に、とくに人間の諸活動が営まれ切り離しがたく対象化された社会空間においては、これに非日常空間で生活し活動する人々とのコミュニケーションが程度の差はあれ付加される。言い換えれば、異文化コミュニケーションが行われる。一般的に言ってフレンドリーな新たな出会いそのものが人間の生活を豊かにするものであるが、方言から異言語に至る異文化との出会いはこれを非日常空間において社会的な規模で体験する機会となる。グローバル化した現代社会においては、ツーリズムは個人が人類であること、言い換えれば類的存在、つまり普遍の人間であることが体験され確認される一大プロセスである。ついであるが、このような意味において、「ツーリズムは平和へのメッセージ」(国連) なのであり、現代のツーリズムは、偏狭なナショナリズムによる敵対的な戦争やテロリズムを抑止する点で、その社会的基盤を創成するという壮大な社会的意義を体现している。

- 20 市場化の下での人間疎外の発展に対し、弛緩する社会的統合を達成するために、非市場原理の世界である各種コミュニティや家族等への帰属とそこでの「絆」の強化が政策的にも喧伝される。

参考文献リスト

- 有井行夫『マルクスはいかに考えたか—資本の現象学』桜井書店 2010
- Blauner, R., *Alienation and Freedom: the Factory Worker and His Industry*, The University of Chicago, 1964 (佐藤慶幸監訳『労働における疎外と自由』新泉社 1971)
- Clark, J. & Critche, C., *The Devil Makes Work: Leisure in Capitalist Britain*, Macmillan, 1985.
- Drucker, P.F., *Post-Capitalist Society*, Harper Business, 1993 (上田惇生・佐々木実智男・田代正美訳『ポスト資本主義社会: 21 世紀の組織と人間はどう変わるか』ダイヤモンド社 1993)
- Dumazedier, J., *Vers Une Civilisation du Loisir*, Editions du Seuil, 1962 (中島巖訳『余暇文明へ向かつて』東京創元社、1972)
- Friedman, G., *Le travail en miettes: Specialisation et loisirs*, 1956 (小関藤一郎訳『細分化された労働』川島書店 1956)
- *Sociology empirique du loisir*, Editions du Seuil, 1974 (寿里茂・牛島千尋訳『レジャー社会学』社会思想社、1981)
- Fourastie, J., *Des Loisirs: Pour quoi Fair?*, Editions Casterman, 1973 (小関藤一郎訳『開かれた時間: 余暇と社会についての考察』川島書店、1976)
- Galbraith, J.K., *The Age of Uncertainty*, Houghton Mifflin, 1977 (都留重人監訳『不確実性の時代』TBS プリタニカ 1978)
- Gramsci, A., *Alcuni temi della quistione meridional*, Giulio Einaudi editor, 1975 (上村忠男編訳『知識人と権力: 歴史—地政学的考察』みずす書房、1999)
- Harvey, D., *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Blackwel, 1992. (吉原直樹監訳『ポストモダン時代の条件』青木書店、1999)

- Haworth, J.T. & Veal, A.J., *Work and Leisure*, Routledge, 2004
- 日高六郎監修『マス・レジャー論』紀伊國屋書店、1960
- Hochschild, A.R., *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, 1983 (石川准・室伏亜希訳『管理される心』世界思想社、2000)
- 池上惇『管理経済論』有斐閣、1984
- 角田修一『生活様式の経済学』青木書店、1992
- 川北稔編『「非労働時間」の生活史』リプロボート、1987
- London, F., *Capitalisme, désir et servitude : Marx et Spinoza*, La Fabrique editions, 2010 (杉村昌昭訳『なぜ私たちは喜んで資本主義の奴隷になるのか』作品社、2012)
- 前田勇『観光とサービスの心理学』学文社、1995
- Marx, K., *Schriften, Manuskripte, Briefe bis 1844*, Dietz Verlag, 1968 (長谷川宏訳、マルクス『経済学・哲学草稿』光文社、2010)
—Mehr Werts III『剰余価値学説史』(マルクス・エンゲルス全集第26巻第3分冊) 大月書店 1970
- Mills, C.W., *White Collar: The American Middle Class*, Oxford University Press, 1951 (『ホワイト・カラー—中流階級の生活探求』東京創元社 1957)
- 三輪卓己『知識労働者の人的資源管理』中央経済社、2015
- 望田幸男・大西宏『ゆらぐ大人=男性社会—世紀末の若者と女性』、有斐閣 1992
- 大橋昭一「ホワイトカラー労働論の国際的諸潮流」(笹川儀三郎・石田和夫編『現代企業のホワイトカラー労働 (下巻)』所収、大月書店、1984
- 尾関周二『遊びと生活の哲学：人間的豊かさと自己確証のために』大月書店 1992
—『現代コミュニケーションと共生・共同』青木書店 1995
- Packard, V., *The Waste Makers*, David McKay Company, 1960 (南博・石川弘義訳『浪費をつくりだす人々』1961) —*The People Shapers*, Little, Brown and Company, 1977 (中村保男訳『人間操作の時代』プレジデント社、1978)
- Parker, S. R., *The Future of Work and leisure*, Granada Publishing Limited, 1971 (野沢浩・高橋祐吉訳『労働と余暇』産学社、1975)
—*Leisure and Work*, George Allen & Unwin (Publishers) Ltd, 1983
- Poston, M., *Time, Labour, and Social Domination*, Cambridge University Press, 1993 (白井聡・野尻英一訳『時間・労働・支配』筑摩書房 2012)
- Rojek, C., *The work-leisure relationship in leisure studies*, (Haworth, J.T. & Veal, 2004)
—*The Labour of Leisure*, Sage, 2010
- Schor, J.B., *The Overspent American: Upscaling, Downshifting, And the New Consumer*, Perseus Book, 1998 (森岡孝二訳『浪費するアメリカ人—なぜ要らないものまで欲しがるか』岩波書店、2011)
- Selye, H., *The Stress of Life revised edition*, The McGraw-Hill Companies, 1984 (杉靖三郎・田大井吉之介・藤井庄治・竹宮隆訳『現代社会とストレス』法政大学出版局 1988)
- 鈴木和雄『接客サービスの労働過程論』御茶の水書房、2012
- Wood, S., *The Transformation of Work? Skill, flexibility and the labour process*, Unwin Hyman, 1989
- 戸坂潤「娯楽論—民衆の娯楽・その積極性と社会性」『唯物論研究』第58号、1937
- 山口正之『現代社会と知識労働』新日本出版社、1972
—『社会革新と管理労働』汐文社、1975
- 余暇開発センター編『時間とは幸せとは：自由時間政策ビジョン』通商産業調査会出版部、1999
- 頭川博『資本と貧困』八潮社 2010